

風姿花伝第二、
物^{もの}学^{まね}条々
唐事

これは、凡^{をよ}そ各別^{かくべつ}の事なれば、さだめて稽古^{きこ}すべき形^{かたち}木^きもなし。たゞ肝^{かん}要^{よう}、扮^{いで}装^{たち}なるべし。又、面^{おもて}をも、同^{おな}じ人と申ながら、模^も様^{やう}の変^かはりたらんを着^きて、一体異相^{さうし}為^したる様^{やう}に、風体^{ふうたい}を持^もつ

〔口訳〕

唐事の物真似は、極めて特殊なものであるから、稽古に於ても一定の定まつた型といふべきものもない。ただ、肝要なるは其の扮装であらう。又面をも、——唐人だとして同じ人間で別に変りはないのだが——一風模様の変わった面を着け、一体に変つた様姿の風体をするが良い。これは年劫をつんだ役者に似合ふ芸である。返す返すも其の扮装を支那風にする以外には、手段はない。又何としても、音曲も働きも、支那風といふ事は、よし真にうまく似せてみた所で、さして面白くもありさ

べし。劫入たる為手より似
合ふ物なり。返々扮装を唐
様に為るならでは、手だて
無し。何としても、音曲も、
働きも、唐様といふ事は、
真に似せたりとも、面白く
も有るまじき風体なれば、

うにない風体なのだから、ただ、どこかに少し唐めいた所があればそれで良いわけだ。この異相するといふ事（などは、まことに一寸した事だが、諸事にわたつて活用さるべき公案である）。何事に於てでも、異相するといふ事は、あまり感心したことではないが、唐様といふものに於ては、凡そ何とも似せやうが無いのだから、普通の人々の振舞と変つた風体をしてゐると、何となく唐めいたやうに他所目に見え、又さう見えれば、それが唐事になるのである。これ等は能の方の故実の心得であるのだ。

唯一模様得ん迄なり。この
異相為たると申事、なに事
も異相為ては善かるまじけ
れ共、凡そ唐やうをば、何
とか似すべきなれば、常の
振る舞ひに、風体変はれば、
何となく唐びたる様に、外

目に見倣^なせば、即^{やが}て其^{それ}に成
るなり。これらは故実^{こじつ}の心
得^え也。

大方物真似^{まね}の条々、以上。

この外細^{こま}かなる事、紙筆に
載^のせ難^{がた}し。さりながら、お
よそ此条々能々^{よくくきは}究めたらむ

物真似に関する条々は、大凡以上で
尽きる。この外微細な事柄などは筆で
はあらはし難い。しかしながら、大体
以上の条々を十分に究めた人ならば、
これ以外の微細な点についても、自づ
と自悟自得し得るであらう。

人は、自ら^{おのづか}、細^{こま}かなる事を
も心得^ふべし。

〔評〕

唐事についての眼目は、異様な風体といふ点にある。支那風を真似
るといつても、当時の交通状態では、勿論まねるべき御手本もなかつた
であらうし、又、真似て見てもそれが見物に面白く感ぜられないであ
らう事も考へられる。従つて、日本人らしくないといふ点が——換言す
れば異様な扮態が——支那らしいといふ幻影をうかべさせれば良いとい

ふのである。一寸面白い考へ方だと思ふ。

物学条々全体に通じて概観すると、先づ総論として、物真似の本義として何事も残さずよく似せるといふのが本義であるが、卑俗なものは、幽玄の理想からして斥けるべき事を説き、次に各論として、女・老人・直面・物狂・法師・修羅・神・鬼・唐事の九ヶ条をあげて居る。そのあげ方は所謂並列的であつて、未だ体系的には叙述されてゐない。これが、応永廿七年に出来た至花道書や、応永廿八年に書かれた二曲三体絵図に到ると、年来稽古条々と相関的に説かれて、非常に組織的になつて居るのを見るのである。